

ラバン理論を用いた学術研究の今日的広がり
とダンス教育における動向：英語および日本語文献
の調査から

橋本有子（お茶の水女子大学）
佐藤真知子（お茶の水女子大学／
フォルクヴァンク芸術大学）

I 背景

ルドルフ・フォン・ラバン(1879-1958)によって展開されたラバン理論は、今日もっとも広汎にもちいられる運動分析法として知られている。また、動きの学習に焦点を当てた舞踊教育法としても、世界の舞踊や演劇などの表現領域において広く用いられており、日本の舞踊教育にもその反映がみられる。本研究は、ラバン理論がどのような学術領域で、どのような研究テーマに関連して用いられてきたかを、日本語と英語によって書かれた学術論文を可能な限り年代を遡って追跡調査し、その傾向を探る。本発表では調査結果の全体像を示すとともに、とくにダンス教育におけるラバン理論活用事例に焦点を当て、その傾向を紹介する。

II 方法

調査にはインターネットのデータベースを用い、2024年7月末までの期間に英語および日本語で発表された学術論文を対象とした。英語論文はGoogle Scholar, Taylor & Francaise, JSTOR, PubMed, EbscoHost, ERIC, Sciece Direct, Scopusを、日本語論文はGoogle ScholarとCiNii Articleを用いた。検索キーワードは英語／日本語それぞれ、Laban／ラバンおよびBartenieff／バーテニエフとした。検索条件は、各キーワードがタイトル、要旨、キーワードのいずれかに含まれていることである。組入基準は、一次資料であること、原著論文ならびに博士学位論文であることである。学会の講演録、学部・修士論文、書籍、学会発表の抄録や発表論文、Webページ等は除外した。

文献抽出・カテゴリー化は、検索エンジンで得られた結果を文献管理ソフトzoteroに集め、カテゴリーに分類したのち、その内容をExcelファイルに転載して吟味し、小カテゴリー化した。カテゴリー化は、2名の著者が分担して実施したものを、互いに評価し合い決定された。このステップは、一工程目は両言語ともにGoogle Scholarを用い、二工程目は取りこぼしている文献の収集を目的にその他のデータベースを複数用いた。最終的に英語416件、日本語70件が本研究の分析対象となった。

III 結果と考察

分析の結果、英語416本のうち369本、日本語70本のうち48本は、LMA/BF, LBMS*（以下ラバンの運動理論と表記する）に関するものであった。それ以外は、記譜法と歴史に分類された。ラバンの運動理論に関するものは、理論そのものを扱ったものを除いて英語は7カテゴリー（ダンス、医療/セラピー、工学、音楽、スポーツ/体育、演劇、その他）、日本語は5カテゴリー（音楽・演劇以外）

表1 ラバンの運動理論が活用されている論文のカテゴリーと数

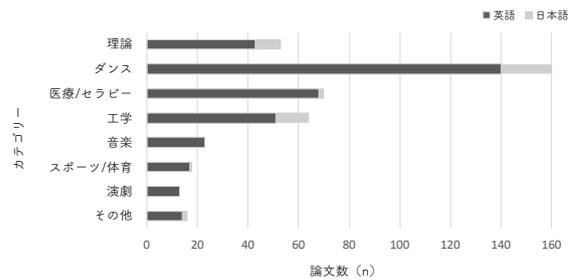


表2 「ダンス」カテゴリーの英語/日本語の論文の内容と数

言語 (論文数)	内容 (論文数)
英語 (140)	教育：学習内容および方法(48)、テクノロジー(25)、パフォーマンス/振付(17)、医学(17)、歴史(14)、分析(13)、組織(3)、その他(3)
日本語 (20)	教育：学習内容および方法(16)、分析(2)、歴史(1)、米国高等教育ダンス・カリキュラム(1)

に分類された。表1にその内訳を、表2に論文数が最多であった「ダンス」カテゴリーの内容を示す。

「ダンス」カテゴリーのなかでも両言語ともに最多となった「ダンス教育」に着目すると、ともにラバンの運動理論が幼児教育から高等教育まで幅広く活用されていること、なかでも高等教育に関する論文が最多であることがわかる。これは、ラバンの運動理論を活用しかつ論文化する人材が高等教育に携わっているゆえだろう。英語の論文はラバンの運動理論全体を活用したものが主流であり、著者の多くがラバンの運動理論の認定資格を保持している。内容は、授業実践に加え理論を活用した新しいモデルの提案やダンスの分析による美学の枠組みの提示、実践の精神性や教室環境の作り方、授業デザイン方法を提示したもので多岐にわたる。また、ソマティック・アプローチ、ムーブメント、エデュケーションといった語が2009年以降にあらわれてくることは、米国ダンス基準書にソマティクスの反映がみられることと関連すると考えられる。一方、日本語の論文は教育実践研究が主であり、エフォート理論以外の理論に焦点を当てたものが少ない。これは、日本の学習指導要領に「多様な感じ」としてエフォート理論のみ反映がみられることとも通ずる。ラバンの運動理論全体の理解を伴わず部分的な反映がなされた場合、ラバンの運動理論を活用した動きの教育が内包する意図や目的が歪曲して伝えられる可能性がある。そのような歪みを回避するためには、どのような内容をどのように、誰が教えるのかが重要であり、専門家育成の方法も検討が必要である。

IV まとめ

ラバンの運動理論が学術論文において最も活用されている領域は、両言語ともに「ダンス教育」である。しかしながら、英語の論文では理論の全体が網羅されているが、日本語の論文では部分的な活用にとどまることが示された。

*LMA/BFはLaban Movement Analysis/Bartenieff Fundamentals, LBMSはLaban/Bartenieff Movement Studies/Systemの略。Body, Effort, Shape, Spaceの4視点がある。表記方法はLMA, BF, LMA/BFが主であったが、2010年半ば頃からLBMSが使われ始めている。